

シンポジウム 「教員養成大学における質保証とは」

コーディネーター 小林 辰至 (上越教育大学 教授)
シンポジスト 濁川 明男 (妙高市 教育長)
越智 康詞 (信州大学 准教授)
今尾 佳生 (玉川大学 准教授)

コーディネーター 小林 辰至
(上越教育大学 教授)

私のほうからシンポジストの紹介とこのシンポジウムの進め方についてご説明を申し上げます。まずお一人目ですが、濁川明男先生です。妙高市教育委員会教育長でいらっしゃいます。続いてお二人目は、越智康詞先生です。信州大学教育学部の准教授でいらっしゃいます。そしてもうお一人は今尾佳生先生です。玉川大学教育学部の准教授でいらっしゃいます。よろしく申し上げます。そしてコーディネーターは上越教育大学の小林辰至が務めさせていただきます。

時間が押していますので、時間設定は討論のところ

で圧縮させていた
だいて、時間は
厳守したいとい
うふうに考えて
おります。

進め方なんですけれども、まず濁川先生、それから越智先生、今尾先生の順で、お一人15分の発表ということをお願いしたいと思います。



シンポジスト 濁川 明男
(妙高市 教育長)

濁川でございます。

教員養成における「質保証」について、15分ですので要点をまとめて早めに話したいと思います。

教育現場から今若手教師に求められることという点で3点挙げてございます。1点目は、創造的で実践的な教科指導力ですね。やはり教員というのははじめは必死で指導書なんかを見ながら授業をやっていきますが、一通りある程度行きますと一つのパターンができてきます。そこからが問題なんです。本当に実践的に開発的に、さらに目的意識的に授業を創造していくかどうかということなんです。数年の教員生活を送って慣れたところで、比較的守りに入っていくというのは正直なところなんです。その意味でもっともっと実践的な教科指導力というのが望まれます。

二つ目には、さらなる経験幅の拡大です。私は総合的学習において「総合的学習は教師の経験の範疇を超えるものは作れない。」と常に言っていました。この経験幅があるかないかで教科指導においてもかなり限定されるということです。要するに経験が創造の基盤をなすということだと思っております。

三つ目、教師としてのたくましさです。今、生真面目な先生が精神的にもろく崩れ、休職されるということが問題となっております。こんな意味で教育現場ではこの三つの力というのが求められると思います。



次の2点目ですが、地域連携の中で見えてきた学生の力でございます。私は大学にもいて、かつ教育長として現場サイドからもう1回これを見つめ直した時に、この教職キャリア教育における実践的指導力の育成、この方向は間違いないと現場から再度確認させていただいたところでございます。

その中の一つにフレンドスクールに反映したフレンドシップの確かな成果があります。妙高市は、昔から6泊7日のフレンドスクールをずっとやってきたんです。当初は5校で妙高高原という限定された地区でもやっていたんですが、今年から全小学校6年生、全部の学校という枠を解体してグループを編成し直して6泊7日やったわけです。これはすばらしかったし、私も感動しました。1日目なんか口もききません。子どもたちは警戒し合っています。それが少しぼつぼつとしゃべり出して、自分の交友関係を広げていきます。そして2日目ぐらいからなごやかになっていきます。3日目からホームシックに入ってきます。4日目はわがまま放題。自我を通し合いトラブルがどんどん出てきます。その後ですね。最後の日にを行うプログラムにグループだけでやるチャレンジタイムがあるものですから、それを作りながら子ども関係ができていきます。最後は涙のお別れという形で子どもたちは変容していきます。この6泊の夜すべてを、学生たちがボランティアとして支えてくれたんです。

大変です。大学の授業を聞いて、それから夕食を食べてあがってきて、朝までずっと子どもたちと関わってくれるわけです。夜10時過ぎには学生ミーティングをやりま。子どもたちは喧嘩もするしトラブルも起こして大変なんです。それを支えてくれるのです。今回は1週間ごとに20人ずつ来て、3回、合計60名の学生さんがそれを支えてくださったということです。無事終わったわけです。2ページの真ん中から下に書いてございます。本当に校長、教員、NPO、教育委員会の職員も総出なんです。その中で、一番子どもたちの心に寄り添うように意欲的に触れ合い、一人一人との会話を大切にしてくれました。就寝時、早朝の健康観察の報告が的確で、具合が悪くなった子どもを引率したり付き添ったりして、本当に場慣れした印象さえ受けました。これ先生方の声ですよ。それから登山に出発する朝、学生は大体だらしないというので有名ですが、4時半に子どもたちを起こして引率して集合し、全員が笑顔で行ってらっしゃいと送り出してくれました。4番目に、3年生

のリーダー性がみごとでした。1年生、2年生も入っていたんですが、それらが10時のミーティングの中でやっぱり的確な接し方、指導のあり方、支援のあり方ということで先輩たちがディスカッションしながら翌日に向けての協議をしてくれました。開会式、閉会式、スタッフ挨拶も非常にさわやかで、目にした校長さん方も本当に感動しておられました。ある校長さんは即うちの学校にほしいと言ってくれました。今日発表した及川君あたりが中心になってやってくれたわけです。

それから、教育実習については全部の学校にお電話をさせていただいて感想をいただきました。この分離方式に対する絶賛の声がございました。特にゆとりが生まれる。今までは指導案作成で、赤を入れられてまた直してくるのくり返して、ほとんどの実習期間がそれで終わっていました。それが研究にある程度構想が練られて出てくる。それによって学生さん自身もゆとりをもてるし、教育活動全般的な関わりをもてるようになった。そして積極的に子どもと遊んでくれたり話してくれたり、そういう面が非常に充実してきた。もう一つは、分離方式は指導する先生方自身も非常に効果があるんです。この実習生にどういう指導でアプローチしたらいいかという、4ヵ月の間で先生方自身もプランが立てられるんですね。双方とも心のゆとりができてきたということで、大変好評でございました。今の段階では全然教育実習に対する不平不満はございませんでした。

3番目ですが、大学と地域連携という視点からの今後への要望ですが、インターンシップ制度というのが今導入されていて、上越市の一部の学校と附属学校で展開しているわけですが、今後もっともっと拡大できないのかということです。例えば教科指導としてのインターンシップがあってもいいんじゃないか。例えば私は理科ですが、理科であったら理科のインターンシップとして1単元、2単元をずっと1校に入ってやる。そうすると毎日行かなくてその授業時間帯前後に行って、又は暇な時に行って教科の先生と相談したりしてやれる。こんなシステムができてきたらもっと現場もありがたいし、また学生さんたちにも大きな力になっていくんじゃないかなと思います。

特にこれから入る小学校の外国語活動、週に1時間だけでございますので、英語専攻の学生さんたちはほとんど現場に入るいい機会かなと思います。

あと学生ボランティアが大変社会教育活動の中で活躍

してくださっているわけですが、だんだんとニーズに応えられるだけの学生がいなくなっています。この辺を大学としてもう少し社会貢献していくようなボランティアというものを、大学が組織的にやってもらえないのかなということです。教育施設、放課後児童クラブとか子どもを対象とした生涯学習というものがございます。

それから最後、4番目ですが、すばらしい上越教育大学であればこそ、質保証という点から何点か率直に言わせてもらいます。ちょっと聞きづらいことも言いますがお許してください。

その一つ目、小学校教員たりとも専門教科の力量は何といっても大切なんです。全教科薄っぺらにやればいいという発想は絶対だめです。力のある先生というのは本当にいいと思いますし、教科の力もちすばらしい実践をした人たちが学校の中核になっていきます。その意味でやっぱり小学校たりともこれは絶対に大事なんです。

2つ目は対人的な関係力、すなわち人との調整能力が大事です。ぜひこれはフレンドシップ事業やインターシップを通して子どもと関わり、大人と関わり、ボランティアを通して社会と関わる。こういった力量というものを大学生の段階で4年間を通して何とか形成していくことが大事です。大学に入ってくる学生自身も高校生までの段階は社会の狭い世界にしか生きてきてない。そういう意味でこの部分は教員の資質の根本に関わる部分でありますのでお願いをしたい。

3点目、特別支援教育、これは今まだ上越教育大学では必修になってないと思います。これはすべきです。ものすごい増加ですよ。どの市でも毎年就学指導委員会にかかる児童が急増しています。学級の中に一人または二人必ずいるということです。この基礎的な学びをしておく必要があると思います。

4点目に、あえて全国のトップを走るために提言としてあえて何点か言いますが、小学校外国語活動が入ってきますので、上越教育大学もそろそろこれに対して何らかの対応をしておいたほうがいいですよということです。

5点目に、理数科教育の充実をということでございます。先ほどの講演の山極先生と一致しますが、当市を全部調査しましたら、理科教育の42%が校長、教頭、教務主任の先生方なんです。他の先生はみんな理科嫌い。これは子どもの理科離れじゃなく、先生方の理科離れな

んです。それが泥沼状態になっていって、どんどんだめにしていっているということです。2年後に妙高市が県の理科教育の小学校、中学校の指定校なんだそうですが、現場でも頑張ります。

それから上越教育大学はここが必要だろうと思うのは、何といても理論と実践の統合です。これはかなり改善が進んでいて、現場経験者と先生がペアで入って授業をやっておられると聞いています。ですが、まず大学の先生方から現場へ足を運んでいただきたい。そしてその教育の現実と自分の教える研究との統合を図っていただきたい。

私が常に言ってきたのは、学問体系で教員養成の授業をしてもらっては困る。教育現場と学問の両方において、その中で教育を担う人たちに何を教えるべきかという教育の体系があるはずだ。教員養成としての教育の体系。これを具体化して授業を構成していただきたいということでございます。それができなければ現場の先生方との連携が大事だろうと思います。

ブリッジ1、初等教育の改善ですが、まだ実現していないと思います。初等教科指導法は2単位ではどうも無理です。理科一つ挙げても、たった15コマでどうして内容までわかるんですか。ですから僕は全国の大学がそうなら、上越教育大学はあのブリッジ1と、初等教科指導法を連動させて、その4単位の中で基本的なことをきちっとやっていくことを提言したいのです。

例えば1年生全員にキャベツ畑へ行って青虫をとってこらせて、毎日キャベツの葉っぱを入れて小さい飼育ボックスの中で育てていく。やがて蛹になる。そしてそれが羽化して出た。こんな経験は学生なんか一度もしていないんですから。これを見たら学生だって感動します。その経験が小学校へ行った時にどれだけの大きな力になっていくか。教科の基本的な内容を連携の中で保証していく必要があるんじゃないかと思います。体育だって逆上がりできないで悩んでいる子どもがいっぱいいるじゃないですか。どうやったら逆上がりが効果的に指導できるのか研究させればいい。そういうものをどんどん扱っていくと自信のついた学生が生まれると思います。

それからフレンドシップ事業のさらなる充実ということでお願いしたいと思います。また、妙高からのお願いでございますが、上越にある学校ならクロスカントリーをぜひプログラムに取り入れていただきたい。雪国立国です。国体が妙高とか魚沼へ来ているわけです。雪国の

大学でクロスカントリーを全く知らないで出て行っちゃう。これは恥ずかしい。複合でちゃんと金メダルをとったじゃあないですか。あれに便乗して上越教育大学もぜひやってほしい。

昨年インカレが妙高で開かれて、私は競技委員ですので行きました。全国の参加大学を見ましたら、みんな都会の大学ばかりなんです。地元新潟大学も上越教育大学もない。全然一人も出てない。さみしい限りでした。そんなこともひとつお願いします。

あとこれだけ必修が増えてくると、4年間ではもう無理なんです。ですから私は上越教育大学は、6年一貫をめざすべきと思います。そうすればインターンシップをどんどん取り入れたカリキュラムができます。学生には6年一貫カリキュラムの中で質の担保をやるんだということを堂々と言っていたきたい。

それこそが本学の質的保証につながるんじゃないかなと思っています。

シンポジスト 越智 康詞
(信州大学 准教授)

ご紹介にあずかりました信州大学の越智です。

本日はこの特色GPにお招きいただきまして非常に光栄であると同時に感謝しております。「感謝している」と申しますのは、教職実践演習というのは全国例外なくやっているわけで、私も信州大学で担当の一人に挙げられており、このように最先端の情報を入手できる機会を与えていただいていること自体が、非常にありがたいことであるという意味です。

上越教育大学でのこの取組について、私なりに印象に残った点を述べさせていただきますと、やはり最初に挙げたいのは、実践現場と上越教育大学との連携の強さです。本当に現場で必要な力をいかに大学の中で身につけさせるか。今まで知的なことしかやってこなかった大学を、本当に現実的で実践的な場に変革するために、ずっと取り組んできた長い歴史があるなど、そしてそうした取組に基づいた上での質保証だということを改めて実感しました。

そして現場とのつながりが強いということは、逆に言う学生が主体的な学びを大切にしているということですね。この取組は自分自身が本当に必要だと思って学べるということとつながっているな。その辺を実感しました。

それから2番目に「分離方式」ということなんですが、実は信州大学も「分離方式」といえばそうなんです。私が教務委員長をやっている時に「分離方式」にしたんですけれども、やはり今日改めて思ったのは、前半と後

半の間に置かれた「研究期間」の大切さです。この「研究期間」をどう位置付けるか。信州大学は前半の部分についてはいろいろ意味付けをしたんですけれども、「研究期間」をおろそかにしてきたなあ今回上越の「分離方式」の取組を聞いて参考になりました。

それから実習ループリック、それから質保証に向けてのスタンダードづくりの取組も印象的でした。この辺はファーストステージから、セカンドステージ、サードステージへと至る段階が、綿密に作られて、しかも地域や学生さんたちとともに、対話しながら作られてきたと。ただ大学教員だけが単独で作ったのではないところ、社会に対する質保証、そういう視点がきちんと込められているところもすばらしいと思いました。

最後に報告された取組の様子から伝わるのは、地域との連携がすぐれていて、実習もそういう安定した基盤の上になされているということです。そうした環境の中できちんと作り上げてきたスタンダードだけあって、このスタンダードは学生が学んでいく上で学生自身の目的や手引きになるし、教員の学生指導の目安にもなるし、さらには、学生が外に出て、現場に出た時も大学でその学生がどういう学びの状態にあり、どのような目標をもってやっているのかということに関係者全員が共通了解の上



でなすことを可能にするという、そういう共通通貨的な役割を果たしているなど感じました。その辺が単なる質保証、単なる指標としてのスタンダードではなく、一緒に学んでいくための確実に前進していくための現実的な手がかりとして機能しているというふうに実感しました。

印象深いことが多々あり、上越さんの話だけで終わってしまいそうですけれども、一応信州大学の取組を簡単に紹介しておきたいと思います。今日は全体の話ではなくて特に「臨床の知」の理念に関わってお話をしたいと思って準備してきました。

まず、「臨床の知」とは何かということですが、中村雄二郎は次の三点をあげています。1) 臨床の現場にみずからコミットすることによって、他者や事物と生き生きとした関係の交流を失わない。2) 個々の事例や個別的なケースが大事で、物事が置かれている状況や場所に配慮する。3) 表面だけではなくて深層の現実にも目を向ける。

これを教育バージョンとしてもってくる必要はどこにあるのか、教師としてなぜ必要かということですが、その背景としては教師の役割というのは専門職であるということがある。しかも反省的实践家という専門職なんですね。専門職というのはどういう役割かという、公共的に高い使命をもつわけですけれども、クライアントという子どもの最善の利益を実現する、そのための自律的な技術や判断力をもっている、それが専門職だと思っただけですね。クライアントの利益ということを中心に考えると、それだけではだめですね。それは人権や尊厳を守ることであり、ひとりひとりの尊厳を守ることを通して社会全体の、社会に対する責任というのが先ほどありましたけど、社会正義を実現していくというそういう使命があるということです。

それから自律的判断力がなぜ必要かという、やはり現場が非常に複雑で、マニュアル通り、こうすればこうできるそういうものではないという現場の現実があるからです。その中で責任をもって根拠に基づいて判断していく力をもつためには高度な能力が必要である。倫理も必要である。そこから専門性が必要になる。

特に反省的实践家というものが要求されるようになったのは、教育に特有の現場の複雑さということがあります。そこでは、単なる問題解決ではなく、問題を適切に診断して解決することが重要で、問題状況を診断すると

ころから専門能力が必要なのです。すなわち複雑な状況の中で問題をネーミングして、それをリフレーミングしていくという、そういうことからその専門性というのが発揮されるべきなのです。

今までの話はかなり理想的な話で、つぎにそれをどうやって大学で身につけるのかということなんですけれども、これに関連して教員養成G Pという取組がありました。

このG Pでは「臨床経験とその省察」ということをテーマに取り組んできました。臨床経験科目が大事だ、現場が大事だということは全国的に言われているわけですが、信州大学としては省察というものをいろんな方法を使って多面的に実施し、省察そのものを省察するというそこに力を入れて取り組んできたわけです。

ですからそれで現場経験をやって4年間で何か実践的な力が確実に身につくという発想ではなくて、省察の仕方とか習慣とか方法を身に付けて、あるいは省察してよかったという実感、あるいは同僚性ですね、みんなと話し合うことがよかったとか、そういう話し合いの仕方とかコミュニケーション力とかそういうものをつけて現場に出ていってもらいたいということですね。そういう狙いをもって「実践とその省察」についての取組をやったわけです。

それから学生自身が主体的に学ぶことを支援するため『臨床経験ハンドブック』を作りました。

その中身で印刷したものをもってきたんですけど、2ページ目のところに全体の体系の図が載っています。ここで体験を蓄積していくという縦の次元とともに、省察を深めていくという横の次元ですね。ここの二つの次元でもって臨床の知と近づいて行くというようなカリキュラムを作り上げていったわけです。

その中でただ単に省察しましょうという掛け声を与えるだけではなくて、INTASCのスタンダード、ポートフォリオ、プロセスレコード、話し合いなどいろんな手段を使っているわけです。

あまり知られていないユニークなバージョンとしましては、プロセスレコードというものがあります。これは、実習生が子どもたちとの相互作用、とりわけ子どもとのトラブルがあった場面など、あのときどうすればよかったのかと迷うような場面を所定の方法に基づき再構成してもらい、これをもとにみんなで話し合っただいすかッションしていくというようなそういうシートです。

ここでは実際に子どもが言ったことと、私が子どもの言動についてこうなんじゃないかと思ったことや感じたことを区別して書いてもらうといったように、事実と感情とを区別して書いてもらうというようなシートになっていて、これを基に先輩からのアドバイスを受れたり、先生からアドバイスを受れたり、学生同士で話し合ったり、そういうような場を取り入れています。

このようなプロセスレコードを取り入れたもうひとつの理由は、確かに現場経験は大切なんだけど、現場だけに没入するといわゆる「訓練された無能力」といいますか、官僚制的な役割に過剰同一化してしまうという危険性もあるからです。そうならないための頭の体操じゃないですけども、違った視点から自分の実践を見直しましょうというそういうレッスンとして入れています。あと教師は子ども理解というのは得意なんですね。子どもを一生懸命観察する。だけど実は理解しているつもりの子どもは自分が影響を与える子どもなんですよ。子どもも先生を見ているわけですが、こうした子供への自分のかかわりやその影響についても省察してもらうわけです。こういう振り返りの練習をして、そこでただちに何か力がつくわけじゃないですけども、そういう区別して振り返っていく癖をつけて現場に出てもらえば、その後伸びていってくれるんじゃないかな、反省することの大切さをわかって出ていってくれるんじゃないかなということの一つの願いとしてやっているわけです。

教員養成 GP のプロジェクトが終わった後、信州大学では授業研究できる先生を多様な教員が関わりながら共に育てて行くという意味で「授業研究アリーナ」という新しい GP の取組を行っています。

ここは現職の先生が特に中心なんですけれども、自分

の実践を振り返る時に一つの観点からだけ振り返るのではなく、多様な観点から、すなわち専門の観点から見れば本当にこの授業はよかったのか、あるいは教育方法という観点から、あるいは子ども理解、心理の観点からどうなのかといったように、多角的に授業を振り返って自分の授業を構成していく力をつけてもらうようなアリーナをつくり、その中で実践研究を展開しております。

最後に、信州大学の今後の課題について述べたいと思います。今日の上越教育大学の取組の話聞いていて信州大学の場合はまだまだ質の保証という観点が弱いなということを改めて思いました。臨床の知はそうなくなってくればいいなという理念レベルの話で、そのための手立てはいくつか考えてはきましたが、それが本当に確実に身についたかどうかをチェックするというのがこれからの課題だと思います。なので、その目安となるスタンダードやチェック項目をこれからどう作っていくかということが大事だと思いました。

いずれにしても教員の質の保証、最低限できる力を確実に保証しながら、しかし大学でしか学べない専門的な知識とか、現場に出てから自分を振り返りながら学んでいける先生を育てていくことが重要だと思います。

その時に今日上越教育大学での取組、とりわけルーブリックというスタンダード、共通通貨としてのスタンダードの取組は、実はそれは質の保証という意味だけではなくて、このスタンダードを協同で創造するプロセスを通して、どういう能力が本当に教師に必要なのか、我々大学も実践現場も一緒に反省していくことにつながるものだと思います。上越教育大学での取組を知り、こうしたスタンダード作りの重要性について、改めて実感しました。どうもありがとうございました。



玉川大学の今尾でございます。先ほどからお話を伺っておりまして本当に楽しく勉強をさせていただいております。特に上越教育大学の取組で学ばせていただいたのが、やはりちょっと古い言葉を使わせていただきますけれども、「志を高く掲げることがどれだけ大事か」というのを改めて実感いたしました。ただそれだけではなくてしっかり理念、志を明確な言葉で表していくということ、その理念の実現のために具体的にどんな方策が打てるのか、オーソドックスなことですけれども、これを実践していらっしゃるということに大変感銘を受けました。

しかも私は本務校では15年来教務教職の担当をしております、こういう実務をやっているんですけども、その立場から言わせていただくと、これを実際に動かす先生方、事務局のご苦労、どれほどのものかということが本当によくわかります。

これは教員の方々の組織、それから横の連携ですね。もう大体組織というのは横で連携がとれないもので、そこですべての物事をつまづきというのが起こりがちですけれども、これが本当に動いているんだとしたらこれは理想的な組織形態なんじゃないかというふうに拝察をいたします。

しかも1年生から4年生にかけてこれだけカリキュラムを体系化し、一つ一つの構成要素に対してしっかりとした意味付けをしていらっしゃるということ、これは私どもも学ばせていただかなければいけない大事なポイントではないかというふうに聞かせていただいております。

玉川大学としての地域連携とそれから教員養成における現場との実践的な取組について話をしろというご用命でしたので、少しお時間をいただきまして話させていただきます。

玉川大学は東京都の町田市という片隅にあります四年生の総合大学でございます、教育学部は平成14年に学部昇格をしましたが、それ以前には文学部教育学科という時代が続いておりました。教員養成に取り組んで60年経っております。

お話を聞いたり、パンフレットを読ませていただきま

して、取組のあり方に関して非常に玉川大学とも似たところがあるなというふ

うに聞かせていただきましたけれども、首都圏の大学であり、通ってくる学生が東京、千葉、埼玉、神奈川というふうに非常に広域にわたることと、それから私学という事情もありまして残念ながら学費がかかるということと、このあたりで多少実際の運営のあり方と回し方の違いが生じてくるのかなと思った次第です。

実際現場とのやりとりというのは長い歴史がございます。長い歴史がございますけれども近年の取組としましては平成12年の4月、東京都の稲城市の市長と私どもの学長とが提携をしまして、そこで自治体と大学との全面的な協力関係をこれから立ち上げていこうじゃないかということでスタートを切りました。

その時に具体的なプログラムとして発足したのが、現場に対して教育学部の学生を派遣していく教職プラクティクムという活動です。これは学部の1年生の後期にあたります10月に教職志望する学生全員を対象にしております。1学年大体300人ほどいます。教職志望の学生300を稲城市内の小中学校、それから幼稚園に関しては部分的には稲城市外のところにも送りますけれども、1日学部の全教員がつきそいまして、現場で子どもたちと交じり合いながら初めて学生ではなく教師の視点で現場を見てみるという体験を行います。

この際、今申しましたように学部の専任教員は全員これに張り付きます。とにかく現場に投げっぱなしではなくて、しっかり養成していく大学の教員の側が現場に学ばせていただくという趣旨です。正直言います1日いるというのは肉体的には非常に辛いところもあり、見直しの声も上がるんですけども、やはりこれは堅持していこうということで続けてきております。

その中でなぜこれを1年次の秋にやるかといいますと、私学の事情でもありますし、総合大学の事情ということもあるんですが、入学してくる学生のモチベーションのレベルというのが極めて多様だということが挙げら

れます。一応教育学部を標榜しておりますけれども、必ずしも現場の教員を志望する学生ばかりではないということです。それから先生になりたいという動機のレベルもはっきりとした現場のイメージをもってくる学生もいれば、何となく子どもが好きだというレベルで入ってくる学生もおります。

学生の動機、それから能力レベルの問題が極めてバラつきが大きいのです。ですからまず私どもでは入学当初、この子たちは教員になることを前提としているんだという前提はまずとりません。そうではなくて一応教育学部をめざしてきて、「これから本当に教員になっていくかどうか自分の気持ちを固めなさいよ」というレベルから始めます。

そのために1年次の初期からいきなり教員養成系の専門的な授業を開始するのではなくて、まずは素地を作っていく状態からスタートします。全学的に1年次教育という形で大学での学問体系を勉強していくための基礎的な機能と、それからキャリア意識を醸成するような授業とを設けておりますけれども、それを踏まえたあと参観実習にいきます。これもあらかじめ事前指導をかけて現場の校長、教頭先生に来ていただいて、講話をしていただき、なおかつ配属校単位でグループにして引率教員の指導を受けさせていきます。

それで1日体験をし、小学校、中学校の場合ですと、1年生から6年生の各クラスに1名ずつぐらい配属を受けて、そこで子どもたちの中で一緒に学習補助をしたり、給食を食べたり、掃除をしたり、遊んだりという活動をしていきます。

これをやりますと学生の反応はほぼ二つに分かれます。やはり自分は先生になりたいという思いを固める学生と、この時点で教職への志望を取り下げる学生もいます。その取り下げた学生に対してはもう一般企業就職をめざしていくための別プログラム、私どもは教育未来構想プログラムとそれを呼んでおりますけれども、別コースで別指導をかけていき、本当に現場に入ってやっていきたいと思う学生に1年次の12月に教職課程への本登録をさせていくというところまで、進路決定を先延ばしさせていきます。

そして志望が固まった学生に2年次から本格的な教職課程の準備を始めさせていきますけれども、まずこの教職プラクティクムが教職課程への大事な導入部分です。つまり実際に自分で現場を見てみるということを導入へ

の大事な経路として位置付けているということです。

そして選択制度になりますけれども、2年生からサービラーニングと称しておりました。これは教育現場へ出かけたインターンシップを授業科目にして位置付けていきます。平成15年度から実施してまいりましたが、平成17年に1学年大体300人いるところの200名を突破する学生がサービラーニングを受講しております。

ただここでちょっと困った問題が起こったんですね。どういう問題かといいますと、名称が現場になかなか理解していただけない。このサービラーニングというのは実践によって学ぶという意味です。サービスというのはこれは実践という意味がありますけれども、現場では学生が何か現場にサービスをしてくれるんだろうというふうに受け取られてしまったところもあって、現場の先生の手が回らないところの補助として学生が使われて、じゃあこのテストの採点をやっておいてとかいう形で、なかなか学生が直接子どもたちと関わるというよりも、先生方の多忙さを補うという形で位置づけられてしまったところがあります。

この当初から名称の見直しをわかりやすいインターンシップにしよう、でもせっかくサービラーニングしてきたからということでいろいろ葛藤がありました。ただここで私どもも少し反省を加えまして、まずインターンシップ担当といって担当職を教員の中に設けました。その担当職が実際に教育委員会と現場まわりを綿密にいたしまして、まずこの現場にこの科目の趣旨を徹底していくということをしてきました。

それでその趣旨なんですけれども、まず理論と実践の相互作用を図っていくということです。それから学生にとってみれば「自分自身の教員志望の動機と、それから自分の適性とを我と我が身に問うてみなさいよ」ということです。

それから現場に適応して教育実習以前に現場慣れをしているということと、それから実践的な感覚を身につけてくる、「自分にとって何が足りないのか、何を学ぶことが必要なのか」という課題を現場から得ていくということです。こういうことをねらいとしているんだということを現場の先生方に理解をしていただきました。

かつ学生たちにも厳重な事前事後指導を行っていくんです。実際にこういう日誌を作りました。これサービラーニング活動報告書というもので、まず最初に誓約書

を書かせます。現場に出ていくということの社会的責任を負うのだという。子どもたちの背後には地域社会、保護者がいるわけで、自分の言動にはくれぐれもやっぱり気をつけていかなければならない。特に社会的なマナーの指導に対して私どもは非常に大きな力をかけているんです。

それからなぜこのサービ斯拉ーニングを受講するのかというその動機をあらかじめ書かせていきます。これがですからポートフォリオとして機能していくわけですね。それで1回ごとの活動の実践報告を書いていきます。

必ずこれは現場の指導担当の先生方にコメントをいただくようにしています。ですから単にボランティアとして現場に行くのではなくて、現場とそれから大学とが共同でその志望する学生を育てていくんだという体制を作っていくということが大事なんだということを共有していったわけですね。

それでこれを強化してやりますと学生の対応というのはほぼ、これもまた二分されまして、一つは、こういう体制をとっているからやろうという学生が非常に多かった。それともう一つは、やはりこれだけ厳重にやられるのであれば、むしろ自由にボランティアのほうでやりたいという学生も少数ですがおりました。

なお本学は、学生の通学がかなり広域化しております。今のところ私どもで提携のある自治体というのが、東京都の稲城市、町田市、狛江市、神奈川県川崎市、相模原市であり、それから大和市からも提携話が起きました。少しずつそうやって提携自治体を拡大していくところではあるんですけども、学生の通学距離というのがこれをかなり上回ってしまいます。それらのすべてに対してきめ細かな指導体制がとれるような配慮が十分できるかどうかというのが今私どもの極めて大きな課題です。

それともう一つは、現場からは「寄りしてくれ寄りしてくれ」というニーズはものすごく高いんですけども、それに対して学生を確保して送り出すということがなかなか難しい。これも極めて申し訳なくは思っているんですけども、その体制でどうやったらこれを実現していけるのか。いっそのことこのインターンシップを必修化しようかという案も出ております。ただその時に私どもとしてこれを踏みとどまらなければいけないのは、その能力に欠けている学生、あるいは動機レベルの低い学生まで現場に出すことはできないということです。

ですから何度も何度も繰り返し覚悟を促していくと同時に、このサービ斯拉ーニング登録の成績規定を設けております。当初成績規定がなかった時代はととてもとてもさばききれない学生数が現場に出てしまったんですけども、一応成績平均値、4が最高として累積で2.5、履修登録をする直前の平均値は2.8以上でなければ行かせない。それから服装やマナー等一定の水準を維持できる学生、それから基本的な生活習得、遅刻なんてとんでもないですし、それから現場に対して、学校というのは組織ですから、組織内部の対応を誤って自分勝手なことをしないということもこれは大事な条件になっております。

そういう意味でかなり組織内のコミュニケーション能力を高めていくということが大事なポイントになってくるかと考えまして、そういう指導をかけています。とにかく教員サイドが本気になってこれに全面的に取り組んでいくということが、何よりもこの体制を維持していく上で大切だということを考えているんです。

ただ効果はこれは非常に高い。何が高いかと申しますと、授業の聞き方が全然違います。やっぱり教育というのは理論的に頭の中でひねくりまわす話ではなくて、やっぱり実践の世界の話です。先ほどから先生方から経験知という話が出ましたけれども、これはまさにそのとおりで、経験がないと教育の話の理論だけでやってみたってぴんとこないんですね。

これをやり始めてから学生の授業の食い付きが全然違ってきます。授業を終えても質問をしかける学生が、これは私の授業だけじゃなくてほかの先生方の授業でもありますし、それから指導法の授業でも私は現場の学校へ行かせて、実際学校の周辺の教育資源とか児童実態、地域実態はどうかということを調査させた上で指導計画を立てさせるようにしていますけれども、現場の中で学生たちが作られていくんですね。ですから指導計画を立てさせるのでも質が全然違ってきております。

そういう意味で大学での学びの効果、それからもう一つは真剣に自分は先生になるんだという進路について考えるようになってまいります。私どもも学生たちをどんどん現場に送り出したいのはやまやまです。実際私学としまして採用試験の合格率というのは極めて重要なポイントになっているんです。ただやはり本当になっていく気持ちがある学生にだけなってもらいたいと思っています。

ですからそういう意味で気持ち固めをしていくという
意味でこの実践等のやりとりというのはものすごく大事
だと痛烈に感じております。

あとはこの効果をいかに系統的に評価していき
けるのか。他の授業科目や教育実習や体験との関連性をどう
いうふうにループリク化していくのか。このループリク
化ということに関しては上越教育大学に学ぶところは
大だというふうに考えております。

それともう一つは、実は私どもは平成17、18年に
七学連携GPという玉川と六つの国立大学と連携した
GPと、それから玉川大学単独のGPと二つのGPがと
れて、そこでいろいろ研究や実践活動を行ったんです
が、その時にベース・スクール構想というのを打ち出そ
うとした経緯があります。これは教職課程登録時点から
学生がその学校で実践していく部分と、それから大学に
戻って勉強する部分と二本立てで、同じウエイトを現場
と大学に置いてやることはできないのかというところで

すね。

これは理論的には極めて望ましくも見えるんですが、
ただ大学で勉強している単位数や時間割設定の問題、受
入校の要請体制と現場への加重負担等、課題も非常に多
いプランになります。これをいかにベース・スクールと
いう形で実践していくことができるかということです。
これ欧米には事例はあるんですが。

例えばペンシルバニア州では半年間かけて教育実習に出
させ、学生はむしろ現場に置いておいて、そこに大学か
ら指導に回るという形を続ける制度をとっている大学が
あります。そのような形態をとってやっていくことがこ
の日本の制度的、あるいは実践的環境で可能かどうかと
いうことを含めまして、今後玉川大学としては研究をさ
せていただきたいというふうに考えております。

やや時間を超過いたしました。ありがとうございました。
以上で終わらせていただきます。

小林辰至先生

ありがとうございました。まだまだ三人の先生方から
いろいろお話を聞きたいところなのですが、残り時間も
少なくなってきました。申し訳ございませんが質疑
の時間は割愛させていただきます、今から私がテーマ
を投げかけますので、お一人2、3分で補足のような形、
あるいは新たな意見のような形で一言ずついただければ
と思います。

濁川先生からは経験が創造の基盤をなすという言葉
を最初にいただきました。それから越智先生のほうからは
経験とリフレクションについて、それから今尾先生から
は玉川大学のインターンシップの取組について具体的に
お話をいただきました。

そういうところに教員養成のスタンダードとループ
リクが明文化された状態が入ってきた時に、それぞれの
取組がどのような効果を上げると考えるか。難しいか
もしれませんが、越智先生から、今尾先生、最後に濁川
先生、よろしくお祈りします。

越智先生

質の保証というのは信州大学にまさに一番欠けてい

る、もちろん今現在はそれに向けていろいろ作っては
いるんですけども、これまで欠けてきた部分かなという
ところは非常にあります。

しかし質の保証ということをや狭い意味じゃなくて広い
意味でとらえますと、現場にすぐ役立つということの最
低限の質を保証するというのはこれは基礎なんです
が、それだけじゃなくて社会に対する質を保証して
いく。それから教員のキャリア、人生全体を通して、
いい教員を作り上げていく上でも質の保証という
そういう見通しのもとで、教員にリフレクション
ということを教えることには意味がないわけ
じゃない。

それと同時にループリクを作ったりスタンダード
を作るのも、我々のリフレクションだと思うんです
よね。つまり教員としてどういう資質が必要なの
か。実際ループリクを簡単だと思って作ろうとし
たらすごく難しい。これを入れてこれを外すのは
どういう理由があるか、どうしてこっちなのか
という非常にもめだとこれは非常に大変な
ことになるんですね。

それは本当に現場の経験と、それから大学と、
それから学生自身、これらが相互に対話しながら
それを作り上げていくということ自体に、も
すごく意味があると思

ます。作ること自体が今までの教員なら教員の自主性のとらえ直しの理論の偏重の部分、あるいは現場だったら現場で実践の現場でうまくいくことを求め過ぎてちょっと理念というか、何のための実践なのかということを考えなかったところが問い直されてくのですね。

そういうところがいろいろ厳しく問い直されて、何が教師にとって必要なのか、ルーブリックを作り上げていくということ自体、重要だと思うけど、それでも終わりでなくて、おそらくそれで何年か実践してみて、それをルーブリックそのものを見直すような時がたぶんあるんでしょうね。そういうことをしながら社会全体が、もちろん上越であったルーブリックと今度信州でやったものをポンと突き合わせてとか、そうやって一つになる必要はないんですけども、お互い対話しながら鍛え上げていくことができたらいかなというふうに、思いました。

今尾先生

ルーブリックもこの質保証も極めて難しいお話ではあるんですけども、ただ一つ考えておりますのは、このルーブリックにしても質の評価基準の策定にしても、工学的アプローチを前提として、あらかじめこうこうこういう項目だという立て方をした上で評価をしていくというやり方と、それからもう一つ、羅生門的アプローチというのがありますよね。言ってみれば実践を先行させるタイプです。

こちらはどういうふうに適応できるのかといいますと、やっぱり学生が大学の教員とか養成側が基準はこうだということばかり言い合っているかもしれないんで、学生がそれを実感してもらわなければいけない。ですから実践の現場にまずは叩き込んで、そこから学生が自分の課題はこうなんだ。今後例えば大学4年間を卒業したあと、どういうことをやっていかなければ自分はこの場で生き残っていけないのかということのをわねとわが身に本当に身にしみてわかってもらって、そこから掘り起こすタイプのルーブリックというのものもあるんじゃないかというふうには考えております。

実際、小学校の英語教育が始まりますね。はっきり申しまして今入ってきている学生たちの英語力といいますのは非常に寒いところがありまして、ある私大の、国際系の学部で英検2を進級資格にしたら半分近く落ちたというのがありましたけれども、私どもも卒業要件とし

て英検の準2の取得は義務付けています。それから教職課程を継続する要件としまして3年次に数学検定と漢字検定の準2級の取得を義務付けています。

これも検定で実際に現場に出れば自分にそれだけの学力がなければやっていけないということを学生にわかってもらう趣旨があるわけですね。ですからインターンシップを終えて実際に多少なりとも子どもたちに何かを教えなければならない時に、自分の学力の低さに愕然とする学生もいるんです。そうしますとその学生にとっては自分の能力向上のための指針として自分は知識をしっかり身につけておかなければいけないと実感されてきますし、それからもう一つ、特別支援が必要な子どもたちと関わってくるのが現場で起こりますと、絶対これは学ばなければ現場に行けないんだという重い問題意識を抱えてくるわけですね。

ですからそういうふうに、まずルーブリックも誰が理解し、実感するルーブリックなのか。そういう意味で早期に学生に現場の中に入ってもらって、自分の課題意識をもつということが有効性のあるルーブリック立ち上げには必要なんじゃないかというふうに考えています。

濁川先生

全国いろいろな大学の先生の話を知ると、スタンダード、ルーブリックを作った大学で一生懸命やっているのは教育実習関係の先生方で、ほかの先生は見ても見ないふりをしているというのです。これがどうも現実にあるようでございます。このルーブリック、スタンダードが有効に生きていくためには、教育実践演習とスタンダードがきちっと連携していくことが大切です。

具体的にどういう実践的な評価をやっていくのかというところが一つの要だろうと思います。この教育実践演習が出た時には、私は正直やったと思いました。ゴールが明確になることによって、これで教員養成のカリキュラムは質的に変わっていかねばならなくなると私は本当に感じたからです。

上越教育大学のこれからについても提言したいと思うんですが、釜田先生が言われた教育実習体系とフレンドシップが体系化されて教育実践演習、スタンダードに向かう体系的な線はわかりました。だけれどこれからの課題であるとする教科専門とか教科指導法とかがまだ放置されているわけです。この部分こそがスタンダードや教育実践演習を意識して、どう変わっていくのかが要だろ

うと思います。

どこでも教育実習というのは変われるんですよ。ですがその教員養成による教科専門の部分、これが僕は要を握っているだろうと思います。教育現場で私が盛んに言っているのは、さっき山極先生と本当に一致したんですが、「本物教育をやらなきゃだめだよ」ということです。

小学校4年生では、郷土の農業用水の開発を副読本を使ってやりますでしょう。教科書は愛知用水とかいろいろ出てきますが、郷土は郷土で作った副読本を使うんです。この地域は上江用水、中江用水、大瀬用水についてみんなやるわけです。妙高で先生方の研修で実際に子どもを連れて見に行ったことのある先生と言ったら一人しかいなかった。あとはほとんど自分も見ることがないのです。結局、副読本は読んで聞かせて終わっているわけです。そんなものじゃ何の意味もないんですよ。紙上学習でしかないわけです。

こんな現状にあるので今、妙高市では本物教育、本物教育と言っている訳です。その意味でも大学の教科専門は教科指導法も含めてもっともっと質的な改善が必要だろう。例えば、理科所属の学生だったら一つの路頭でどれだけの学習活動がここから想像できるのか、徹底して調べさせればいいんです。それから火山性の土と水で運ばれてきた土とどっちが出てきたんだ、何が証拠だ、どれ一つでもすごい勉強です。そういったことでカリキュラムを作っていったら、よりよいものになるんです。例えば大学の卒論で岩石のものすごい細かいところをやらせ、これ本当に教員養成の卒論なんだろうかと私は疑問に思うけれども、だけど専門はおろそかにしちゃいけないという思いもあるのです。この本物教育をやるためにもやっぱりこのルーブリック、それから教育実践演習をめざして大学全体が改革されていくことが、私は上越教育大学が全国の教員養成のモデルとなっていけるとおもうと思います。

ただし、あまりにも大学の授業そのものが教育現場にシフトしていくのは危険だと思っています。やはり学問とその教科指導としての専門性というバックフィールドをしっかりと学生につけていく、この両輪があってこそ、僕はすばらしいモデル校になるんじゃないかなと思います。ちょっと言い過ぎたのは許してください。

小林辰至先生

前半部分で濁川先生がおっしゃったこと、私がコーディネーターとしてまとめようと思っていたことを全部もっていかれました。先生は、先ほど申し上げたように本学のカリキュラムの問題点を百も承知でいらっしゃいます。

先ほどの濁川先生の言葉をまとめとしまして、「じゃあ我が大学は、これからどうするのかということをちょっと申し上げて、こうなればいいなと、いや、やらねばならぬぞ」ということをこの場でお伝えしたいと思います。

スタンダード、ルーブリック、まだ学内ではオーソライズされておられません。今年度中に教育研究評議会等できちんとオーソライズして教職員に周知しないとこれは闇に消えていきます。こんなことになってはだめです。

その後に濁川先生もおっしゃいましたが、スタンダードが傘ですから、その傘からずっと教職専門、教科専門、教科指導法等に下ろして行って、それぞれ評価基準が作られなければなりません。そしてそれがきちんと体系化された時に、濁川先生が最後熱く語られたような教員養成のモデル大学になれる可能性がある。これをやらなければ本学は消え去る運命にあるのかもしれない。副学長がいらしていますが、ちょっと大胆なことを言ったかもしれない。これから短期間に学内でのオーソライズという課題が残っているというふうにコーディネーターとしては感じております。